

稀有な縦隔腫瘍の2例：血管腫及び過誤腫

志 田 寛 村 松 昭 野 村 節 夫

信州大学医学部第2外科学教室

Two Cases of Rare Mediastinal Tumors : Hemangioma and Hamartoma

Hiroshi SHIDA, Akira MURAMATSU and Setsuo NOMURA

The Second Department of Surgery, Faculty of Medicine,
Shinshu University

緒 言

丸田外科教室において昭和44年12月までに手術を施行した縦隔腫瘍は胸腺腫5例、胸内甲状腺腫3例、奇型腫3例（奇型腫1、皮様嚢腫2）、神経性腫瘍3例、気管支性嚢腫1例、血管腫1例及び過誤腫1例合計17例である。即ち胸腺腫、奇型腫及び神経性腫瘍の占める割合が大きく、この頻度は縦隔腫瘍の本邦集計と同様であるが、血管腫とくに過誤腫は稀れた縦隔腫瘍と考えられる。今回はこれら2例の症例を若干の考察を加えて報告する。

症 例

症例1：10才、男性。

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：1963年4月、学校検診にてレ線上、縦隔洞に異常陰影のあることを指摘され、本院小児科に入院し精査の結果胸腺腫を疑われたが自覚症状全くなきため、経過を観察することとして退院した。その後約3年間経過を観察し、1966年6月手術適応を決定するため当科に紹介され、手術の目的で入院した。自覚的には時々咳嗽を認めるのみで、呼吸困難、嚥下障害及び筋無力症等は認められない。

現症：体格中等、発育及び栄養ともに良好。理学的に心、肺に異常を認めず、顔面及び頸部に浮腫並びに静脈怒張なく、また頸部リンパ節腫脹も認められない。血液像は赤血球450万、Hb83%、白血球4,900。尿、便ともに異常を認めず。肝機能及び血清電解質は正常で、血圧100~60mmHgであった。胸部のレ線所見についてみると、正面単純撮影にて左側上縦隔に異常陰影があり、側面にてこの陰影は胸骨直下の前縦隔にあることが判明した（図1、図2）。また断層撮影では背部より9cm、左側より10cmの部位で最も明瞭な異常陰影がみられた（図3、図4）。静脈撮影を施行してみると、腫瘍の圧迫及び癒着によると思われる左腕頭静脈の欠損像を認めたが（図5）、胸腔鏡では腫瘍は肺

と関係なく比較的境界鮮明なることが確認された。以上の所見より胸腺腫の疑いとして1966年7月最低温31°Cの単純低体温麻酔にて手術を施行した。胸骨正中切開で入ると腫瘍は前上縦隔にあり、超雞卵大で、左胸腔内に突出しており、心嚢、左腕頭静脈及び胸腺との癒着を認めたが、肉眼的に良性の胸腺腫として、胸腺の一部を含めて腫瘍を摘出した。

肉眼標本：摘出腫瘍は6×6×4cm、32g、の淡赤色、充実性、表面平滑、弾性軟、断面は海綿様構造を呈していた（図6、図7）。

組織所見：病理学的検索の結果、静脈性の血管壁からなり、内腔の著明に拡大した血管腫であった（図8）。術後経過は極めて順調で、術後24日目治癒退院した。

症例2：37才、男性。

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：1968年7月集団検診で胸部レ線上左肺野に異常陰影を指摘され、本院戸塚内科において精査の結果、縦隔腫瘍と診断され手術の目的で当科に紹介された。自覚的には時々左胸部に圧迫感があるのみである。

現症：体格は肥満型で、栄養良好。理学的に心、肺に異常所見は認められない。血液像は赤血球472万、Hb90%、白血球5,600。肝機能及び血清電解質は正常値を示した。胸部レ線正面単純撮影にて左肺門部より肺野にかけて小児頭大、円型、境界鮮明、均等な異常陰影あり、側面撮影にてこの腫瘍は胸骨直下の前上縦隔にあることが判明した（図9、図10）。また断層撮影にて背部より16cm、左側より8cmに腫瘍の中心があることが確認された（図11、図12）。気管支造影及び食道造影を行ったが異常は認められなかった。以上の所見より縦隔奇型腫を疑い、1968年12月手術を施行した。左後側方切開にて開胸すると、腫瘍は超手拳大、一見奇型腫様で、前縦隔に位置しており、縦隔肋膜を切開して腫瘍を摘出した。腫瘍は肺及び気管支とは全

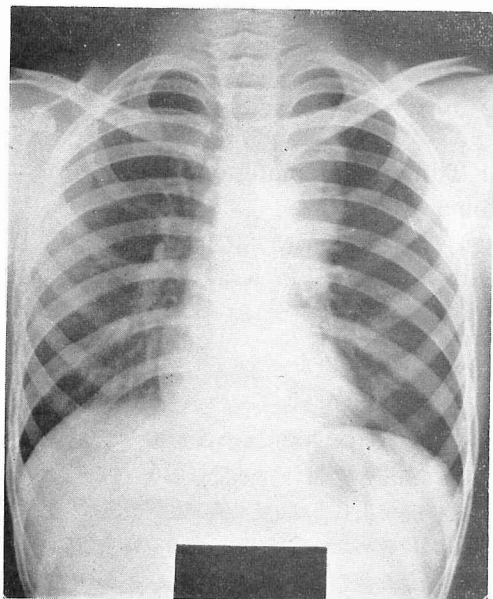


图 1. 单纯摄影(正面)

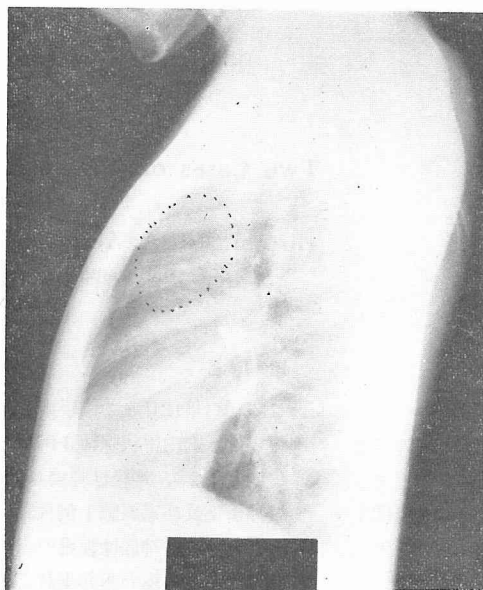


图 2. 单纯摄影(侧面)

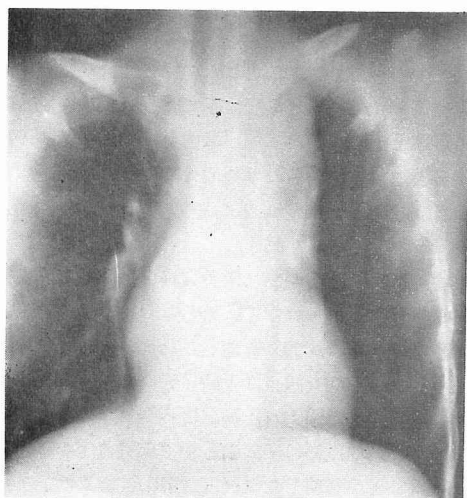


图 3. 断层摄影(正面)

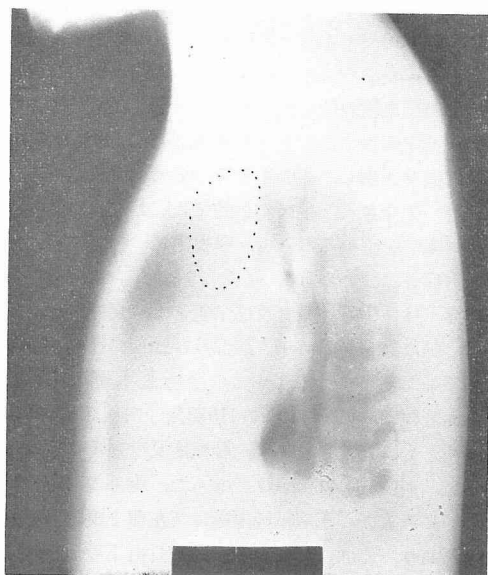


图 4. 断层摄影(侧面)

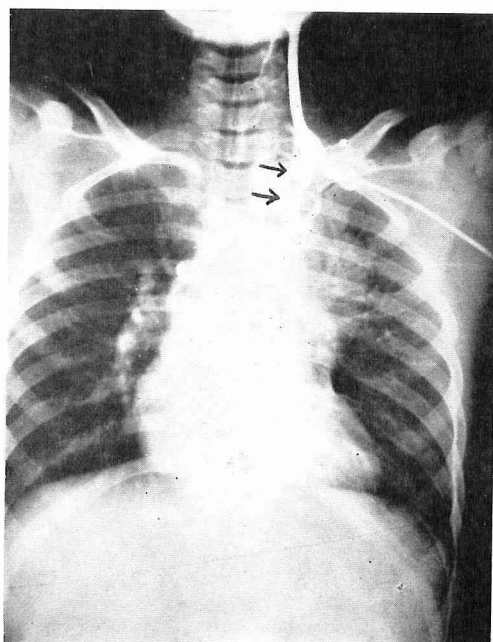


图 5. 静 脉 撮 影

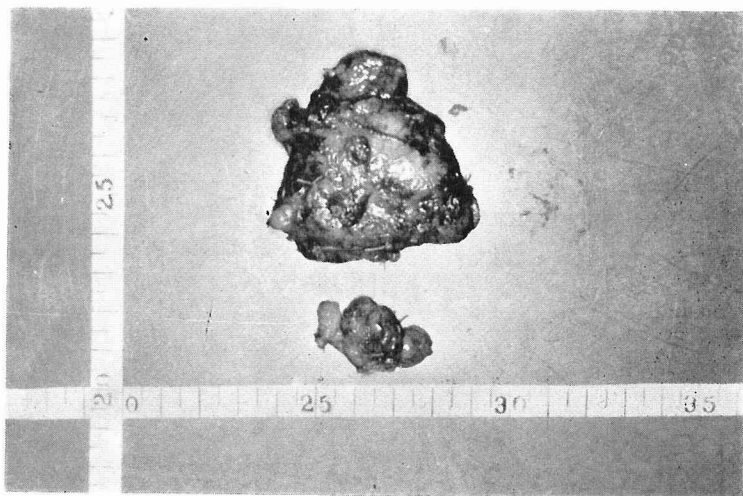


图 6. 摘 出 標 本 (外 觀)

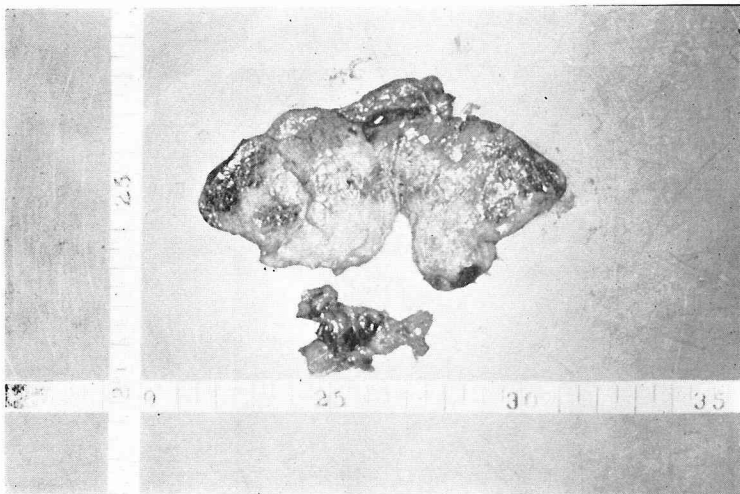


图 7. 摘出標本
(剖面)

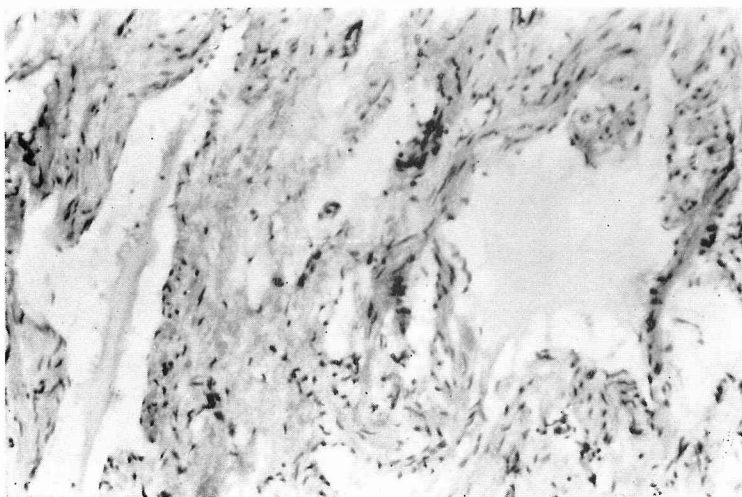


图 8. 組織所見

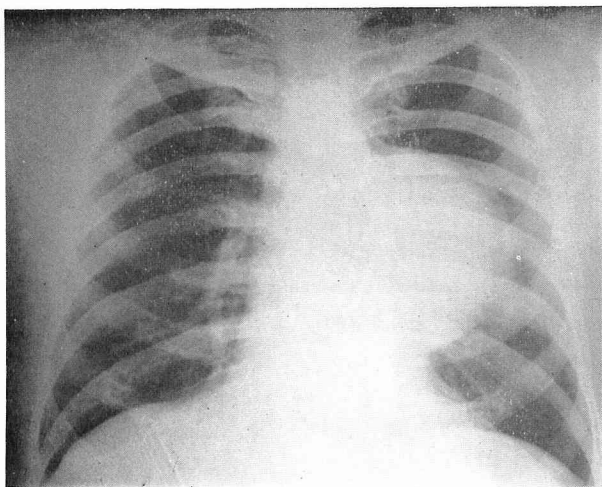


图 9. 單純撮影 (正面)

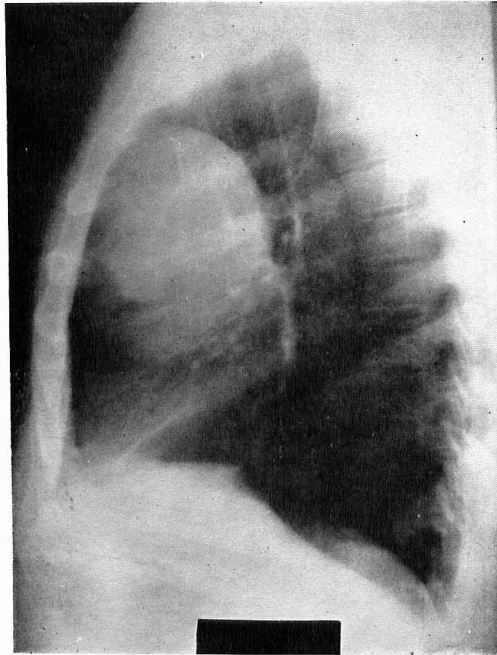


图 10. 单纯摄影(侧面)

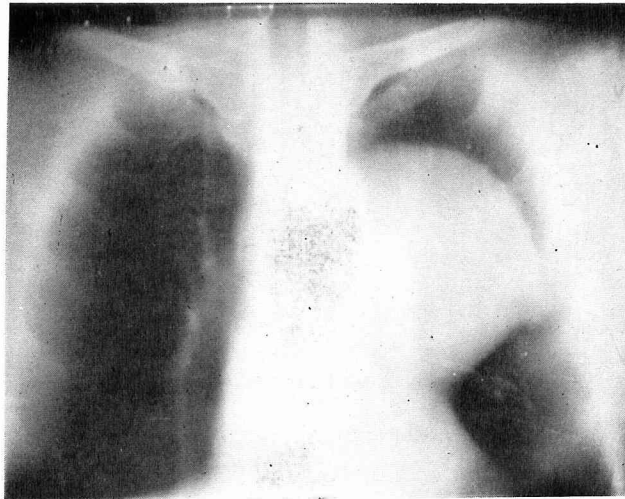


图 11. 断层摄影(正面)



図 12. 断層撮影(側面)

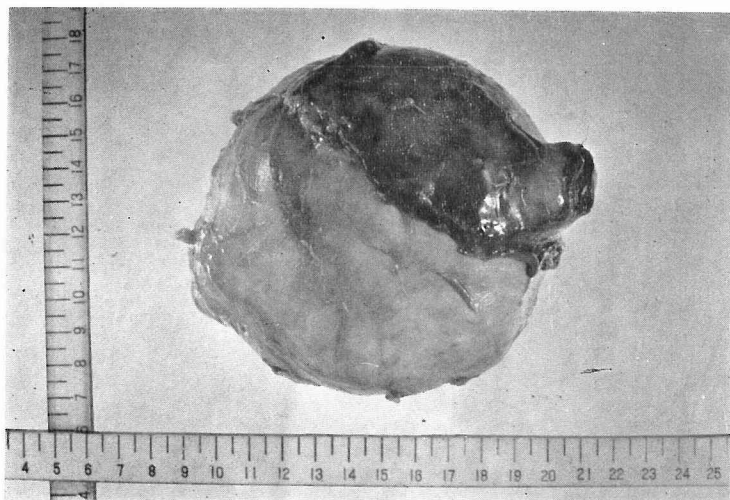


図 13. 摘出標本(外観)

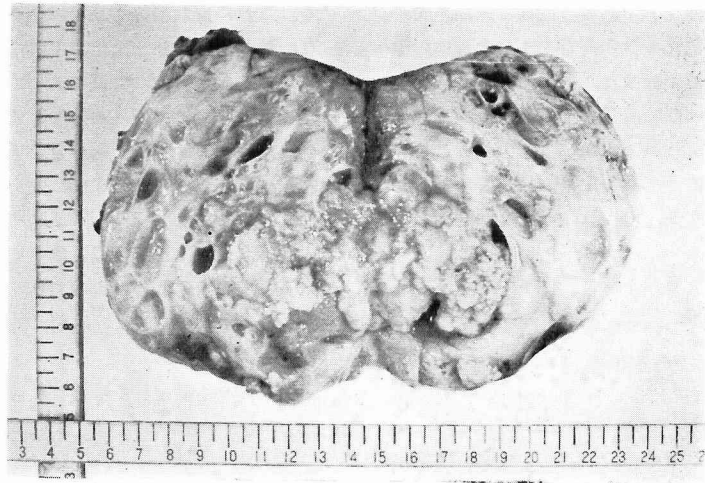


图 14. 摘 出 標 本 (割 面)

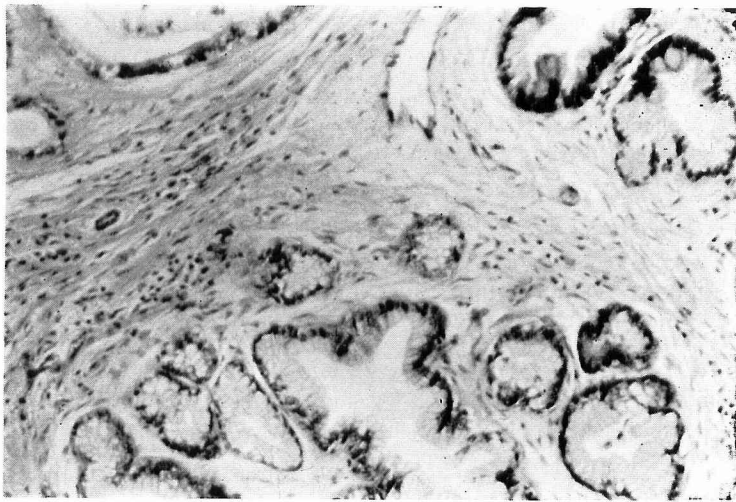


图 15. 組 織 所 見

く無関係であった。

摘出標本：摘出標本は13.5×10.5×8.0cm, 477g, 充実性, 被膜を有し, 弾性軟である。剖面は灰白色でやつ黄味をおび, 淡褐色粘液性の内容を入れた数個の嚢腫を認めたが, 毛, 歯牙等はなかった(図13, 図14)。

病理組織所見：様々な肺, 気管支の胎生期構造が混在してみられる bronchial cyst のやゝ分化した型の気管枝性過誤腫(良性)であった(図15)。

術後は経過順調であり, 術後33日目治癒退院した。

考 按

まず, 縦隔血管腫についてみると, 縦隔腫瘍中血管原性腫瘍に関しては, Seybold¹⁾, Thomas²⁾, Persalo³⁾, Grimes⁴⁾, Maurer⁵⁾, Emery⁶⁾, Ringertz⁷⁾, Nelson⁸⁾等の報告があり, また本邦においては, 木村⁹⁾, 松隅¹⁰⁾等の剖検例による報告につづき, 手術例では桑田¹¹⁾, 山中¹²⁾, 赤武¹³⁾, 遠藤¹⁴⁾, 稲田¹⁵⁾, 砂田¹⁶⁾等が各々1例を報告し, 羽田野¹⁷⁾は自験例3例を報告しているが, 赤倉¹⁸⁾の統計によれば外国では縦隔腫瘍中血管原性腫瘍は12例, 本邦では518例中7例であり極めてまれなものである。

発生年齢についてみると, Balbaa¹⁹⁾の集計によると66例中2才未満のものが5例を占め, また本邦の報告例9例中にも2才未満のものが1例含まれており, これらは先天性のものと考えられる。また9例中5例が20才未満であり, 若年者に多いことを示している。吾々の症例も10才の男子であった。

発生部位については, Balbaa¹⁹⁾によれば前縦隔に多いとされているが, 本邦では前後縦隔ともに差異がないようである。吾々の症例は前上縦隔にあった。

診断に関しては特有な症状もなく, 透視下に搏動を示すものも稀であり, レントゲンキモグラフィオン, 血管造影等を行っても確定診断を下すことは困難とされている。

発生母地は不明のものが多く, これがその特徴とされているが, 吾々の症例は手術所見よりみると胸腺と密接に関係しており, 手術診断では胸腺腫と考えられた程であった。

縦隔血管腫の良性悪性に関しては, 一般には血管腫は良性であるが, 縦隔に発生するものには悪性のものが比較的多く, Seybold¹⁾は17例中8例, Balbaa¹⁹⁾は34例中10例の悪性例を報告している。吾々の症例は辛い良性のものであったが, 本腫瘍が若年者に多く発生し, 悪性化する危険も充分考えられるので, 若年者において本腫瘍が疑われた場合には積極的に根治手術を施行すべきであろう。

過誤腫は一般に肺, 肝及び腎等にみられる腫瘍であ

り, 胸部においては肺過誤腫として知られ, 比較的稀れなものではあるが最近においては塩沢²⁰⁾の集計がある。これに反し縦隔過誤腫は極めて稀れなものであり, 葛西²¹⁾の本邦932例の集計中唯一例のみと報告されており, 最近では沖縄において16才女性の左側前縦隔に発生した砂川²²⁾の報告をみるのみである。本症に特有な症状はなく, したがって術前診断は極めて困難と考えられる。吾々の症例は病理組織学的には, 肺組織成分を有する気管枝性過誤腫であるが, 手術所見よりも明らかな如く気管枝とは全く無関係であり, 恐らく縦隔に迷入した型のものであろう。縦隔における本腫瘍の発生については, 病理学的にも種々論議される問題と考えられる。

以上縦隔腫瘍としては稀れな血管腫及び過誤腫について報告した。

参考文献

- 1) Seybold, W. D. : J. thorac. Surg., 18 : 503, 1949.
- 2) Thomas, N. K. : J. thorac. Surg., 20 : 321, 1950.
- 3) Persalo, O. : Thorax, 7 : 178, 1953.
- 4) Grimes, O. F. : J. thorac. Surg., 25 : 324, 1953.
- 5) Maurer, E. R. : Surgery, 33 : 556, 1953.
- 6) Emery, J. L. : Brit. J. Surg., 40 : 514, 1953.
- 7) Ringertz, N. : J. thorac. Surg., 31 : 458, 1956.
- 8) Nelson, T. G. : Dis. Chest., 32 : 123, 1957.
- 9) 木村 : 東北医誌, 26 : 49, 1940.
- 10) 松隅 : 癌, 34 : 124, 1940.
- 11) 桑田 : 胸部外科, 10 : 386, 1957.
- 12) 山中 : 胸部外科, 11 : 79, 1958.
- 13) 末武 : 胸部外科, 11 : 450, 1958.
- 14) 遠藤 : 外科, 22 : 589, 1959.
- 15) 稲田 : 胸部外科, 11 : 544, 1958.
- 16) 砂田 : 胸部外科, 12 : 1149, 1959.
- 17) 羽田野 : 日外会誌, 63 : 198, 1962.
- 18) 赤倉 : 外科, 20 : 225, 1958.
- 19) Balbaa, A. : Brit. J. Surg., 44 : 545, 1957.
- 20) 塩沢 : 胸部外科, 20 : 97, 1967.
- 21) 葛西 : 胸部外科, 23 : 137, 1970.
- 22) 砂川 : 沖縄医学雑誌, 6 : 69, 1966.

(昭和45年1月1日 受付)